

第25回ごみゼロプラン推進委員会

日時：平成24年7月9日（月）14：00～16：00

場所：三重県栄町庁舎 4階 第41会議室

（開会あいさつ）一略一

（岩崎委員長）

只今ご紹介いただきました、四日市大学の岩崎でございます。本年度も1年間よろしくお願いたします。

それでは、早速議事に入りたいと思いますが、今日は何かを決めるということではなくて、基本的には昨年度のごみ処理の状況、それから今年度の取り組みの方向を、これは生ごみのリサイクルを中心に、それがポイントだということは、前回のごみゼロプランの計画の中でも中心に据えてありますので、それを具体的に今年やっていくという話をまず県のほうからお伺いし、そしてそれに対してそれぞれのお立場からいろいろご意見をいただければというのが、今日の会議の趣旨ということであります。一応2時間を想定して、その間、忌憚ないご意見をいただきたいというふうに思っています。

それでは、最初の議題、23年度のごみ処理の状況等についてご報告いただけますでしょうか。

（事務局）

一資料1説明一

一資料2説明一

（岩崎委員長）

今、23年度のごみの量の速報値も含めて、去年どういう形でごみゼロ施策に取り組んできたかという結果報告をいただきました。

去年は紀伊半島の水害もあったので、ごみ量自体は順調に減るというわけにはいかなかったけれども、逆にリサイクル量は上がるという、ちょっと皮肉な結果ではありますけれども、一応そういう状況であった。

そういう中で、プランを進捗化するためのさまざまな取り組みをされたということですが、ここまでの間でどうでしょうか、何かご質問、ご意見がございましたら、ぜひお寄せいただきたいと思いますが、どうでしょうか。

なければ、今後の取り組みはまた後ほど全部総括して、その時にご質問等をいただければというふうに思います。三功さんにいろいろお話をお伺いしたいなと思ったんですが、

考えてみたら次のところのほうがいいのかなというふうに思っています。

じゃ、次に進んでもらいましょうか。

(事務局)

—資料3説明—

—資料4説明—

(岩崎委員長)

ありがとうございました。

先ほどの実績も含めて、それぞれの立場でこれから取り組んで行かれる計画についても含め、何かお気付きのことがあればご意見、ご質問をいただければと思います。

例えばさっき、これはまたもったいない普及啓発のほうでのお話になるのかも知れないけれども、やっぱり小学校・中学校でこの「もったいない」のパンフレットでやりたいという時には、もうこれは出口先生、スケジュールは決まってしまうものなんですか。

(出口委員)

年間のスケジュールはもうだいたい決まっているので、その学校の中に環境教育みたいなものを設定して、こういう内容のことをやろうというところから入ると思うんですよ。ところが、そうでない場合だとなかなか難しい。

(岩崎委員長)

そうすると、学校現場でというのはもう来年度、ある程度早いうちに、変な話、唾を付けていけないといけないわけですよ。それはだいたいいつ頃までにやっておかないといけない話なんですか。

(出口委員)

前年度の2月ぐらいに1年間の反省をするんですよ。次年度はどんな方向で、今年度に行ったことを修正して、こんなことを入れていこう、あんなことを入れていこうという話し合いが2月ぐらいから3月ぐらいにかけてやって、もう3月の下旬には新体制の準備で、4月には新体制なんですよ。ですから、新体制の中にこの内容が入ってなければ、ちょっと苦しいのかなと思って。

ただ、ある程度何しようかという部分もあるんですよ。そういう部分になら入るかなと思うんですが、長期的に計画的に入れていくには難しいかなと思いますが、ワンポイント、ツーポイントで空いているところに入るなら入るかなとは思いますが。

(岩崎委員長)

少なくとも来年の2月までにはきっちりと、こういうものがありますよということはもちろんとお知らせしておかないといけないということになりますね。それと講師の手配の話ですね。

(出口委員)

やっぱり学校も、世の中の流れがあって、環境のことを重視していく流れの中で、こういう「もったいない」ということが上がってくると、入れる動機になってくるんですけど、そうでないとちょっと入れにくい。みんな関心がなくなって来ているので。一時期、環境の話は、特に「もったいない」は、ワンガリ・マータイさんが来られた頃に「もったいない」という言葉が出てきて、そして一時期、その「もったいない」という言葉を取り入れて何かをしようという動きもあったかと思うんですが、そんな時期のほうがいいんじゃないかなと思って。ですから、意識が高い状態にあるのか、低い状態にあるのかということで、例えば地球温暖化に関しても今ちょっと意識が下がってきていますので。

(岩崎委員長)

それどころじゃないという感じになってしまっていますからね。

(出口委員)

3. 11以降、原発の問題、節電の話に変わってきていて。環境問題にしる何にしる、世の中の流れがあって、その流れにうまく乗せるといいんじゃないかなと思って。ぜひとも入れて欲しい内容なんですけどね。

(岩崎委員長)

その入り方なんですよね。前回もちょっと出ましたが、なかなかそこが難しくて。

(高屋委員)

先生にそういう意識もなかったら、ねえ。

(出口委員)

教師のほうにそういう意識がなかったらね。

(高屋委員)

ある会議で、要するにその環境のことをする時間であっても、自分ではそれだけの力がない。だからこれを何かの都合で、これは環境に関係があるんですよというふうにしてしまう。

自分が環境のことを喋れない先生が本当に多い。その中でこれを取り入れていくというのは、先生の意識から変えていかないと、私は無理だと思います。課長にも申し上げたこ

とがあるんですが、よほど自分たちがこれをしたいのなら、自分たちが本当にその意識を持って、自分たちが、言って悪いけど、小林さん自体、堆肥のことでどれぐらい分かっている？

(事務局：小林)

堆肥のことは、まだ全然存じ上げないです。

(高屋委員)

組成調査に行ったことある？

(事務局：小林)

組成調査にはまだ行ったことないです。

(高屋委員)

県の人たちがそれをはっきり分かって、そこに飛び込んでいかないと、「さあ、先生方、してください！」「さあ、食改の人たち、してください！」と言っても、食改自体が県の組織でありながら、県全体に行き渡っているとは限らないんです。ある程度では採っているけれども、ある部分では採っていないという市町もありますから、だからそれもはっきり言って、すべて食改に言えばすべて県に行き渡るというものではないんです。ですから、そこを自分たちがどれだけやっという意気込みがあれば、自分たちからそれを「堆肥とは一体何ぞや？」、組成調査をしながら「もったいないとは何ぞや？」ということをやっといういかないと、多分先生たちもウンと言わない。

(事務局)

なるほど。分かりました。

(片野委員)

小学校の給食の残り物の堆肥化をさせてもらった時なんです、校長先生のほうはまず学校でやりますと一応決めるんですが、やっぱり先ほど高屋委員が言われたように、先生たちの意識が薄いかなと思って。私は、決められたので毎日小学校に通い続けていたんですが、2、3ヵ月ぐらいは先生に無視されたんです。それでも一応決めたことなので、やっといううちに子どもたちが毎日通っている私のことを可哀そうだと思って、子どもたちから寄ってきてくれるというふうなことになっていったんです。

そこからやっぱり実際子どもたちと一緒に絡むということになってくると、その時にやっという先生が認めてくれて、それをやっというまでに半年以上、本当に毎日通い続けて半年以上かかったという経緯がありまして、それが1年続き、2年続きとなってくると、例え

ば校長会議の中で「うちの学校では堆肥化をしている」というようなことを言うようになるという、そういうプロセスというのがすごくありますので、小学校は先生の中では閉鎖的というのがありますので、言っても、言ってもやっぱり分からないので、一番は子どもたちを味方に付けるというのが一番早いかなどは思います。

(高屋委員)

三功さんみたいに回収を取っている学校はいいですね。

(片野委員)

最初はボランティアでやらせてもらっていて、今は津のほうの事業で「くるりんフード事業」というのがあるんですが、三功のほうでは4社させてもらっていて、もう一つ、安濃のほうの堆肥化の事業者さんが4校受け入れているんですが、そこは毎日回収させてもらって、年に1回、環境学習じゃないですが、簡単な収穫体験をさせてもらうということをやっていますので、そういった学校のところへまずそういう文書を持って行かれると、担当の先生たちもそれを見て、初めて見るということがやっぱり多かったです。津市さんのほうと交流し合って、次はどここの学校へ話を持っていくのかということも、県のほうで話し合っていていただくと、入りやすいかなと思います。

(名和委員)

今、学校のほうでの環境学習ですが、去年の秋ぐらいからちょっと要請があったので行きて、今年の名張市の全学校に行こうという決意のもと、校長会というのが小学校と中学校でありまして、そこへ説明に行かせてもらって、去年は7校、特に剪定枝の資源化と、それから生ごみはハンドルで攪拌するようなタイプですが、それを持って行って。それと基本的な、「ごみとは何か」についてパワーポイントで講演とか、当てながらやるのと、それからクリーンセンターのごみ処理施設の、今ちょっと山奥のほうに行っていますのでなかなか見学に行けないので、そのビデオを見てもらったり、今はだいたいそんなメニューで1時間半コースで12、3項目、地球温暖化もちょっと入れたり、特に何をしたいのかということを知って、メニューに合わせて体験型の学習で、今もう引っ張りだこという感じで、あと夏休みまでちょっとしかないので、12日にできないやろかということで、もう1学期で10校目ぐらいかな。

やはり、学校校長会の場でしっかりと言えば、それから熱く訴えると言うか、それと特に不法投棄を拾っているポイント、誰もがごみを捨ててあるというのは分かるし、特にファーストフードの店の駐車場に行くとある。ごみはどこから出ているか、家庭で出てい

る、お店で出ている、捨てられてある、そのへんからのキーワードで、特に剪定枝をチップ化していく、3センチぐらいのチップにできる、そういうパッカー車みたいな車で行くんです。そういう車を見るのが、小学生はものすごく食い付きがいいんです。それから、今度はチップが出てきて、その細かさ、あるいは匂い、それを体験して「臭い！」と言ってみたり、「温かい！」と言ってみたり、それをしながら、この人たちはこの資源化する仕事と、もう一つは人が捨てた物を拾っているんだと。それからまた、テレビや洗濯機が捨ててある場面、あるいは道端のごみの場面もスライドで見せて、僕はもうそこで喋るのを止めて、実際に行っている人の声を聞いてくださいと。やはり捨てるのは簡単であっても、やっぱり拾う勇気がなかなか持てない。

そういう実例をやると、我々が行ったことを今度は作文に書いてもらいます。今日来た人たちへのメッセージを書いてくださいと。お礼は何も要りませんので、励ましの言葉をくださいということで。そうすると全部の学校が書いてくれて、それがまた普段ごみを拾っている方々はものすごく励みになるんです。

そういう形で、やっぱり地域、学校で支え合って、最初は緊急雇用で去年でやったんですが、ごみを拾うということはちょっと抵抗感があって、知り合いに見られたらどうしようとかいうのがあったんですが、今は誇りを持って、時々子どもたちに声をかけられたり、地域の方に声をかけられたりして、非常にいい感じで行っています。

最初の校長会の時はちょっとシーンとして、その時はあんまり質問もなかったりしますが、やっぱり教育者というのは熱いところがあると思うんです。特に4年生、やっぱり4年でないとダメなのかなと。全校もやってみたり、中学校もちょっとやってみたり。中学校はやっぱり1年しか無理だったので、やっぱり危険かなと思ったんですけど、やっぱりチェックしていくのは、これはもう科学的な理科の観点でどんなことができるということを見てもらう。それから、やはり子どもたちに、見た後、あなたたちが今日体験したことは、必ず家に帰って家の人に言ってくださいと。兄弟とかお母さんとか、それから夏休みになって親戚に行ったらおじいちゃん、おばあちゃんにも言ってね、多くの人に伝えてくださいと。それから、今日は4年生だったけど、小さい学年、大きい学年の子たちにも言ってくださいと。とにかくあなたたちが広げることが資源循環の社会を作っていくことだと、そういう形で言っているのだから、今はものすごく引っ張りだこの状態です。

それもまだ5月の連休明けに校長会に行った途端なので、1ヵ月ほどで10ヵ所ぐらいやって、議会の対応もありながら、議会をやっているか、環境学習をやっているか、どっち

か見たいな状態になっています。

名張市の場合、特に生ごみの試行事業でいろいろお世話いただいたんですが、やはり費用的な問題ですぐに全域というのはなかなかハードルが高いことがあると思いますので、まずはこういう教材をいただいたら、ナンボでもいただいたら活用させていただきますので、もし余っておれば使いたいと思いますので、よろしくお願いします。

(高屋委員)

やっぱり熱い地域は行政マンですよ。

(事務局)

頑張らせていただきます。

(岩崎委員長)

どうなのでしょうね。「水平展開」というのが今年の一つのキーワードですね。その水平展開のためにというところなんだけれども、例えば三功さんの循環野菜の収穫体験、生ごみの堆肥化見学ツアーというのは、これは今年も地域ごみゼロネットワークの中での水平展開の一つになっていくということなんです、こういう機会に、水平展開していくためにはどんなことが必要だというようなことは何かありますか。

(片野委員)

昨年、見学に来られた皆さんが一番していただけたのは、その方たちは意識の高い人たちばかりです。でも、実際にその生ごみを減らす時に堆肥化をしているんですが、それがうまく行かないということで、だいたいそこでやってみてもやっぱり途中で止めてしまうという方のほうが多いんです。

でも、知識はすごくいっぱい持っていらっしゃる方が多くて、その方たちが求めているのは実際に現場的な課題と言うか、どうやったらもっと堆肥を作ってそれを作物に利用できるのかというところを、大人の人たちももっと知りたいというようなことは言っておられました。ただ話を聞かせてというのではなくて、実際にそれがやり甲斐であったりというところも含めて教えてあげられるようになると、すごく食い付きがいい。

(岩崎委員長)

そこにすごくニーズはあるということですね。

(片野委員)

そうですね。やっぱり安全なものを摂りたいという意識が結構高かったのも、そこをもっと知りたいと。作り方とか、例えばこれがどういうふうに変化して、自分が作った堆肥

をどうしたらもっとおいしい野菜が作れるようになるのか、そこまで知りたいというところまで私たちは求められたと思います。

(亀井委員)

私は、もう7年、小学校へ4年生の環境授業で行っているんですが、たまたまこのきっかけになったのが、私の孫が1年生の時担任だった先生が4年生になって、「亀井さん、環境の授業を何か、私は手持ちがないので、教えて。」と言われて、生ごみ堆肥を持って行ったらそれがうまく行って、校長先生も3代目なんですけど、今年もさせていただいて、もう子どもたちに私たちの方法の床台作りから、最後、堆肥ができるまで、だいたい半年以上かけて、で、できた堆肥が、子どもたちが持っている畑で使って、最後はそこで取れた野菜で料理を作ってくれて、私たちを招待してくれるのが締めなんです。

学校へはそういう具合で、代々4年生の環境授業は私たちのグループとなっているので特に問題はないですが、今度、松阪市住民協議会が全市に立ち上がって、それでその住民協議会の中で自分たちはこういうことをしたいというのをアピールしたところに、25万円を8チームがもらったのかな。この前、プレゼンテーションに行ったら、たまたま受かりまして、だいたい10回ぐらい講習会を開いてくださいということで、その講習会を開くまでは私たちの小さい小学校区なんですけど、そこで減らしてごみは何%減ったかは松阪市のほうが計算を出しますということで、目標は10%減らそうという大きな目標が上げられているんですが、そういうふうにして今年はちょっと動けそうかなという感じで、その25万で何とか。

それで、さっき高屋さんが言われたように、松阪市の方が、私たちは今、ログケースを予定しているんですが、結構金額が張るので、リング箱を市場のほうでもらって、その蓋だけ作ってリング箱で始めたんです。そうしたら松阪市の方が、「そのリング箱では見栄えが悪いので、松阪市として出すのに、これはなあ…。」と言って、作ってきたのがヒノキの箱なんです。何でも立派やったら良しというのも、実際に私がやってみたら、水はけは悪いわ。それで、これはもう私がしていたらあかんと思ったので、市の人に「自分でこれをやってみて！これでいいかどうかやってみて！」と言ったら、「もう腐ってきました。」と。それこそ家が建つぐらい立派な木で作られたら、水はけは良くないし、水は溜まるし、自分たちで経験しないとおたくらも物が言えないから、私がいくらやって結果報告を出したところであかんということで、今、市のほうへそれをさせているんですけど。

松阪市も、たまたまりサイクルセンターが立ち上がりましてので、そこで講習会を、私

たちの方法だけじゃなく、いろいろな方法の生ごみのリサイクルをしましょうというのが始まって、一番初めは段ボールで、段ボールは私たちは知らないから、受けに行きますとということで、専門の先生を呼んで、4回ぐらい松阪市もしてくれるようになりましたので、ちょっと今年は松阪市も生ごみが減るかなと。

だから、学校はたまたまいい具合に孫がいたということで、私たちの地域はよそから入ってくる人がいないんですよ。もう昔から田舎の人たちで、顔を見たらこの子はどこの子が分かるような地域に住んでいますので、子どもたちとの連携もものすごくできて、子どもたちも挨拶がすごくできるようになって、私が行く時にはおばあちゃんを全部連れて行くんです。おばあちゃんたちが一緒にできる場所はしますが、話をする時は一緒におってもらんですが、そうすることによって人間関係が良くなってきたなあというふうに思っていて、今年は楽しみな年です。

(岩崎委員長)

一旦、小学校に入ってしまうと、今度は抜けられないぐらいずっとという感じですね。

(亀井委員)

そうです。変な言い方をしますと、先生は4年生の環境の授業を楽するために私を呼んでいるのかなと。もう私に任せておいたらしてくれると。紙芝居の人と腹話術の人を連れて行って2回講義をして、あと、切り返しは毎週行くんですけど、2回講義をする時、一番初めは腹話術の人を呼んで、腹話術でこの環境の部分の一部分をしてもらいと子どもたちが喜ぶので、で、次に二次処理の時は紙芝居の人に来てもらって、その人と一緒に講義をします。私一人が喋っていると飽きてきますので、そういうふうなことを利用してやっています。

(岩崎委員長)

いろいろと工夫をされて、学校というところは、一旦入ると使われちゃうということですね。

それともう一つ、今あったのは、松阪も確かに住民協議会の組織ができました。それから、例えば県内で言うと伊賀、それから名張も住民協議会が立ち上がっています。伊賀、名張、そして松阪、それから伊勢が今できつつある。そういった身近な地域で自分たちで取り組めることをやろうよ、そういうものに対して市も積極的に金銭面だけでなくて応援しようという傾向がすごく今ありますから、そこも一つ今回の「もったいない」も含め、ごみの減量というのはどこでもまずテーマとしては上がるんですが、それで生ごみの減量

をしようという話にはなるんだけども。

そう言えば先週の土曜日だったか、伊賀で住民自治協議会の昨年度の事業報告会の中では、生ごみの堆肥化で助成の補助金を使ってやったんだけど、残念ながらうまく行かなかったというような、そんな話があったりもしました。そういうところできっちりと普及啓発はやっていく必要はあるんだろうと、特にターゲットにはなるのかなというふうには思いますね。

(亀井委員)

さっき野菜を作ると言いましたが、私たちのグループは結局はごみ減量が目的ではないんです。なので、今度みんなに講習会をする時は、最後まで野菜を作っていて、その野菜を売るというのも含めて、そうすると地域の人が元気になってくれるかなという事で、そこまでしようと考えています。

だから、野菜づくりというのは皆さんには道の駅とかいろんなところで売るところでできましたので、やっぱりそういう有機野菜でちゃんと作って、消毒もしないで作ったというのは、待っている人がどんどん増えてきましたので、そこを利用して。

ごみ減量だけでここに入ってきてしまうと、何か行政に担がされているような感情を持ってしまうけど、これを使って野菜を作ってお金儲けするんだよというところまで入ると、喜んでしてくれます。

(岩崎委員長)

それは絶対そうだと思いますね。やっぱり金を稼ぐというのは、これは重要なことなんですよね。それが次につながる話だし。だけど、なかなかそこまでの話をご理解いただけない部分というのもないわけじゃないですね。

(片野委員)

さっき言い忘れたんですが、小学校に新しく入られた先生、大学を卒業して入って来られた先生は、研修制度で他業種へ3、4日間ぐらいの研修制度があるらしいんですね。それで学校の先生がうちの会社のほうへ4日間ぐらい、朝の収集から全部堆肥化のところも、それから4日間に分けて畑のほうへ行ったりという研修の受け入れをさせていただいたことがあるんですが、それを見ていて、講師の方を呼んで出前授業というのがあるんですが、実際にそういうのを経験していただいたほうが私はいんじゃないか、もっと伝わりやすいんじゃないかなと思いますので、もしうちとしてはそういうふうなことで、講師の方々を研修に出すというほうがいいんじゃないかなと思います。

(岩崎委員長)

なるほど。いろいろ具体的なご意見が出ました。

(名和委員)

明日もやりますし、12日も1校入っているので、良かったら見にきてください。明日は急ですけど。いろいろなテーマでやりますので、本当の実演というのは子どもたちがものすごく喜びます。この間、一番喜んだのは、やはりパッカー車を持って行って、その蓋を開けてその中に入るんですよ。その経験は、その学校はわりにいろんなクイズを出してもちょっと手が挙がりにくかったので、外へ出てパッカー車とチップカー車を両方並べたんですが、そのパッカー車の中に入りたい人を聞いてもおそらく数人だろうと思っていたら、ほとんど手を挙げました。それで10人ずつ入ってもらって、これはもう卒業写真を撮っているんじゃないかというぐらい写真を撮って、みんな大喜びでした。

とにかくパッカー車に入ると言うことは、単に入ると言うより、まずごみへの意識が、おそらく一生、パッカー車に入ったことによって、一生ごみということを考えると思うんです。今は「汚い」とか「臭い」かも分からないけれども、おそらくこれをなくしていこうとか、やはりその経験が理論的に分からなくても、後で振り返った時にはやはりそういう中に入ったという経験は、後でその人それぞれ、子どもたちが体系的にしていくということ。

わりに学校の先生はネットワークがあるので、ここでこんなことをしてもらったというのはすぐによその学校に行くわけですよ。今年行った学校でも、去年来てもらってお世話になりましたとか、異動によって他の学校に行くから、3、4年経ったらもう攪拌されて、それこそこも環境学習が当たり前ようになるので、おそらく一番いいところを取ろうという感じになっていくんじゃないかなと。それはここ半年ぐらいの動きがそれはできると思いますので、どこの市町村でも、行くのは大変と言えば大変ですけども、その時間さえ作れば結構普及していくと思います。

名張市も、有料化をやったし、容器包装プラスチックもやったし、オールステーションにしました。あと、法律とか、あるいはごみを減らそうと思ったら、もう子どもたちとか市民、事業所の実践しかないんです。だから、大掛かりで費用を費やすことができないのならば、やっぱり意識を変えて、ちょっとしたことを身の回りから実践していかないと、特に去年から震災の関係でエネルギーのこと、それから地球温暖化のこと、台風が来ればこういうふうなことが発生の原因にもなっているということであれば、本当にスムーズの

聞いてもらいやすい要素が備わっていると思いますので、どんどん、どんどん、三重県中のことを考えたら、名張市だけじゃなくて各地でやっていってもらったと思います。

(岩崎委員長)

いかがでしょう、ついついやっぱり、今、名和さんがおっしゃったように、この県のごみゼロプラン自体もある意味、リサイクルの部分、減量はもう生ごみの話を中心にならざるを得ないし、そうすると、それをどうやってやっていくかというのは意識啓発だよねというところで、じゃあ誰に対してと言ったら、やっぱりまずは子どもからというところが、この冊子に辿り着いているわけで、今日の議論も、これをどうやって学校現場、あるいは住民協議会に入れていくかというのが中心になっているわけですが。

どうなんでしょうか、もったいない普及啓発の話についてちょっと説明を聞きましょうか。だいたいその話ばかり出ているんだけど。

(事務局)

—資料5 説明—

(岩崎委員長)

時間がなくなると困るので、ついでと言っては語弊がありますが、資料6も、こういうことをやるんだよということで、ちょっとご報告だけお願いできますか。

(事務局)

—資料6 説明—

(岩崎委員長)

ありがとうございます。

行政回収以外の部分について、今データが民間回収については必ずしも十分でないということもあって、今年はそれをやってみようということなんですけど、この15万4,000トンが民間で資源化されているというふうにもしも仮置きしたら、行政によるリサイクルで18.8%、行政と民間のリサイクル率を足したら38.9%というふうに書いてあるけれども、これは三重県だったらこれを足したらすごいことになりますよね。

(事務局)

そうですね。福井県は事業所からの自主処分量というのは含まない状態で1.8倍ぐらいにはなっているのかな。それを考えたら、最低でも行政が把握していない民間資源化量というのは2倍はあるんだろうと推定されますね。

ですので、民間資源化量というのが実際のところ、回答してくださらなかったりとか、

そういうこともあって完全な把握というのは難しいんですが、かなりの量が発生しているということは明らかに推定できるので、資源化に回っているとは言え、発生していることには違いがないので、発生抑制に向けた何か取り組みを考えていかないといけないのかなとは思っています。

(岩崎委員長)

という実態調査をやりますよというお話と、それともったいない普及啓発、この2点について、もうあまり時間が残されていませので、この際ということでぜひ何かございましたら。

(高屋委員)

24年度は講師養成研修募集に始まって、登録に至りますけれども、25年度は派遣になってきますが、この時の派遣された方々への旅費とか報酬はあるんですか。それだけの予算は取ってあるんですか。

(事務局)

25年の予算要求はこれからなんですが、制度として県がやっていく場合に予算を要求することは可能ではあるんですが、最終的には市町の方にも活用していただきたいということ考えた時に、市町のほうで予算を獲得できるかというのが未知数ですので、そのあたりはどのようにやっていくのがいいかというのはちょっと検討を要すると言うか、これから検討させていただきたいと考えています。

(高屋委員)

ただ、それこそこれは県がはだてることだから、はだてて、それに対して市町に丸投げということもおかしなもんだし、県と市町で考えていかないといけないことだったら、こういうことがあるからということ市町に言いながらやっていかないと、名張市さんみたいにダーッと進んで行って、市の職員としてこのようなことをやってくれるんだしたら、それはそれでいいけれども、こうやって登録して自分たちで行くとなると、それは本当にどこが身分保障をするのかということになってきたら、そういうところのこともきちっとしていかないと私はいけないと思います。

学校の先生は多分これで当てにならないと思うんです。けれども、その中で講師の養成とか市町の職員を使っていくとなると、先生は先生でいいですよ、お給料が付いているし、旅費が付いているし。だけど、やはりこの講師に対してはそれなりのものが、せめて旅費だけでも付けていかないと、「あんたらは好きでやっとなんやろ！」と言われてたらそれまで。

私も好きでやっているから。だけど、そんなわけにもいかないと思う。

だから、25年は25年である程度のことを市町と一緒に考えていくという方式を取らないと、いいことを考えても何にもならないことになると思います。

(岩崎委員長)

今後の考え方ですが、そこは何らかの形で費用弁償の話というのも考えて行かざるを得ないだろうなとは思いますが。特に講師養成でやってみようという人は、もうそれで無償で多分行っちゃうんですね。けど、その行っちゃうということに甘えていいのかというの、私も思います。

じゃなければ、じゃあそれはどこから出すのかというのは、なかなか、ね。

(高屋委員)

言い出しにくい。

(岩崎委員長)

それはそうですね。きびしい部分があるでしょう。事故の保険の問題も当然ありますしね。

(亀井委員)

旅費よりも何よりも、事故がもし起こった時はちゃんと補償をしてもらえるようにしていかないと。

(岩崎委員長)

他にどうでしょうか。何かお気づきになったことがあれば。

では、1点、前の話に戻って恐縮なんですけど、川崎さん、廃棄物会計はどうなんですか。ちゃんと使っているんでしょうかということなんですけど。

(川崎委員)

廃棄物会計は県で集計して、それをいただいているんですね。それで直接会計が働いているということはないんです。去年と今年でどうかなという比較ぐらいのことで。

(岩崎委員長)

何となくもっと使われていていいんじゃないのかなという気がするんですけど。使われ方としては、県として想定範囲内なんじゃないかな。

(事務局)

具体的な使い方を示しながら、やはりコスト意識とかそういった部分を持っていただいて、例えば必要であれば経営コンサル的なそういった研修を行うとか、そういったことも

必要なんじゃないかなというふうには考えます。市町の人たちからもご意見をいただきながら、そのへんはやっていきたいと思っているんですが。

(岩崎委員長)

なかなかコスト計算自体、県もそうだけど市町もなかなか、今までやっていないから。「やっていない」と言うと語弊があるけれども。

(川崎委員)

先ほど名張市さんの話で、堆肥化の話が出たんですが、うちのほうは堆肥化は田舎ですので、各家庭に簡易なコンポストをたいてい持っているんです。市長はそれを普及せよということで、うちはもう集めて、行政がお金をかけて集めて堆肥化するよりも、田舎だから自分のところで持ってくださいという、それは補助金を付けているんです。

ただ、残念なのは、旧大安町時代に一度調査したんですね。コンポストの電動化は4万円、半額補償で上限4万円、そこを調査したんですね。やっぱり町場ですのである程度花壇もいっぱいになってくる。結局、減量せずごみとして出す、そういう傾向が50%を超えたんですね。それで電動はもう補助金を、簡易なコンポストの5,000円に変更したんです。

確かにうちには焼却施設があるんですが、そののほうも堆肥化してくれるなど。可燃ごみが多くて生ごみは少ないから、温度が上がるので、結局、消石灰を打って、水を打って、そのお金が莫大なんです。それでさっきの堆肥化と逆行するんですが、うちのほうは堆肥化は行政としては取り組んでいないんです。

ただ、1校だけ、山郷小学校は環境学習で、NPOさんの協力を得て、そこでは1年間ずっとやっていこうということでやっています。

(高屋委員)

生ごみだけが環境教育じゃありませんからね。

(川崎委員)

うちのご存じのとおり15年に4町で合併しまして、それで1町は桑名広域で、あとの3町はあじさいクリーンセンターなんです。昔からここは一貫して一緒の教育をしているので、環境学習でも見学でも毎年あるんです。

ただ、先生の任地がある員弁は何べん言っても環境教育をやらせてもらえない。先生は中学校は一生懸命頑張ってもらっていますけど、他の小学校は全部、先週も山郷小学校が2時間、僕はよう喋らんのでうちの若い人にやってもらっていますけど、他はほとんどやってもらっている。員弁町だけはなかなかやっていただけないので。

(岩崎委員長)

合併しても、まだそんな感じなんですね。

(川崎委員)

合併でものすごく今、いろいろな地域で差が出ていますね。

(亀井委員)

コンポストなんですけど、最後までちゃんと仕方を説明されていますか。松阪市の場合、渡したら渡したままなんです。そうすると、もう畑にあれをたくさん入れ過ぎるとモグラが発生するんです。それでやり方をちゃんと教えてもらっていない。ただ、持って行ってパンフレットか何かをもらうだけだと、もう畑に放りっぱなしの人がいっぱいいるので、松阪市でもこれに対する教育もしましようと言ったんですよ。本当の作り方を教えればちゃんとできるけど、ウジ虫だけの人もおりますし。

(川崎委員)

うちのほうは農協さんで買うというのが多いんですね。農協さんはきちっと指導してくれていると思うんですが、一般のスーパー等ではなかなか説明してもらってないと思います。うちのほうでは、領収書をいただくと、購入先はほとんど農協さんが多いです。

(亀井委員)

それともう一つ、これは全然関係ないかも知れませんが、この前、橋本先生の生徒さんたちが必ず実習を兼ねてみえるんです。その時に、名古屋の人が2人見えまして、これからは生ごみが減りますというのは、マンションがみなディスポージャーになってしまう確率が高くなってきて、名古屋では生ごみが足りなくなって、そういうことができなくなると言われると、そうしたら次に私は思うんですが、下水はどうなるんだろうかと。下水から流れていった後の環境汚染は誰が調べてくれるのか。三重県もマンションがいっぱい建ってきて多分そうなる行くんでしょう。私らは田舎に住んでいるので分からないですが、そうなった時のことは県は考えているのかなと。実際にはごみは減りますけど。

(岩崎委員長)

それは見えなくなるだけですわね。

(亀井委員)

そうです。で、下水に流されて、その下水は大丈夫なんだろうかと。私らは海のそばにおりますから、海へ流れて行ったら…。

(高屋委員)

下水は、あれが地域にあるやろ？

(亀井委員)

地域にあっても無理だという先生の話もあるんですよ。それ以上流し込んだら、今のあれでは無理だろうと言われると、私らは海のそばにいてノリ養殖をしていますよね。そのノリがこれから先育つんだらという問題まで考えると、県のほうは考えているのかなと。

全然違う話になりましたけど。

(岩崎委員長)

確かに下水道の話というのはそうなんですよね。ディスポーザーというのはどうなんでしょうね。そう言われてみれば、三重県内でディスポーザーの話というのは…。

(事務局)

一時、そういう話は以前にありました。水濁防止法の関係で、そういう啓発を若干やりかけた時がありましたが、今、それがマンションへ普及しているという話は話題にはなかったですね。

(亀井委員)

名古屋のほうはもうほとんどマンションが建てばそうなると言っていました。

(事務局)

一時期、確かにそういう話がありました。それで、いわゆる合併浄化槽だったら負荷がかかり、当然問題がありますけど、下水道だと汚泥が増えるということで、排水的には処理できる能力はあるかと思うんですが、一般的な汚濁量については把握する時はちゃんと調査しますので。

そうですか、そういう話もあるんですね。

(岩崎委員長)

だから汚泥の量がすごく増えるというぐらいですかね。とりあえず流す水は基準まではきれいにするはずですからね。

(事務局)

処理施設の設計の時にそういうことも踏まえてやりますので。合併浄化槽だとそれなりの限界値がありますので、そういうことをされるとやっぱりパンクしたりすると思います。

(岩崎委員長)

いい時間になってしまっているんですが、この際せひということで、どうでしょうか。

ご発言いただければと思いますが。

やっぱりどうしても「もったいない」のせっかくのパンフレットをどうやって有効に使うかということが今日は議論の主題になっています。確かに高屋委員がおっしゃるように、来年度から実際に講師が動くとなると、やっぱりこれを使って研修をする際の保険の話であるとか費用弁償というようなものについては、これはやっぱり一定の配賦というのはなくちゃいけないだろうというふうには思うし、その時に実際もう今やっていらっしゃる方、食改さんも含め、これからやろうという方、今実際にいろいろ取り組んでいらっしゃる、そういう時に皆さんのお話をお伺いいただきながら、制度としてきちんと根付くようなものにはしていただきたいなというふうに思います。

さっきもちょっとありましたが、松阪もそうだし、伊賀もそうだし、名張もそうだし、結構今、住民協議会のほうはある意味、今、お金を持っているんですね。あちらは結構お金を持っているんですが、学校はやっぱりなかなかそのへんのお金が出ない。それをどういうふうに手当てしていくかというのは、やっぱりちょっと考えどころだろうと思いますけれども、そこは、てなことを言えるのもこの時期までで、秋以降、あんまりそういうことを言えないんですね。10月から私、教育委員長なので。だから、言ったら言った分、自分の首が締まる可能性は否めない。だから、この際ちゃんとやっぱり予算を確保しないといけないなということを第三者的に言って、報告したいと思います。

実はこれ、最後なんですけど、私はこれを事前に50部ほどいただいて、大学の都市政策の授業の時に学生たちにやらせてみました。先週やらせたばかりなんですけど、ただ、さすがに学生でありますから、後ろのほうの現状から行って、それで拡大生産者責任とか、こういうのを説明しながらの話だったんですが、やっぱり一人暮らしの学生も結構いるので、ほんと、とんでもない、「お前ら、この“生活からごみを見ると”、これ、可燃ごみだったらどうやって捨てているのか、ここに全部書いておけ！」とか言って、それでこの花のところに学籍番号と名前を書けと言って、今、うちの研究室に40部ほどこれを回収したものがああります。これを明日には見始めて、生活からごみを見て、生ごみを減らすためにどういうふうにしたらいいかというのをちゃんと考えたことを書けということをやっております。

やっぱり恐ろしく、とにかく捨ててしまうというのが基本だったという印象、ざっとしか読んでいませんが、受けておまして、本当にこういうパンフレットで学生たちに教えないといけないなというふうにはつくづく、先週やってみたんですが、思っておりました。

(高屋委員)

私、本当にそれこそこれを皆さんが作られたんだったら、小林さんはこの担当だったら、西島さんも組成調査にきちっと自分が行ってくるとか、そして「堆肥とは一体何ぞや？」ということを実際に自分たちが分からないことには、東員町がいろいろ勉強している、大台町も、ありとあらゆるところが堆肥に取り組むために勉強している、その方たちと話を合わせていくとなったら、自分たちが知らなかったら本当に置いてけぼりになると思うので、それをきちんとしてください。お金がかかってもしてください。本当に組成調査は行くべきだと思います。見る目がいっぺんに変わります。私も行きましたよ。

(事務局)

了解しました。

(岩崎委員長)

どうでしょうか、この際。

(名和委員)

先ほど言われた地域との連携ですが、名張市ではさっき言いましたチップカー車、剪定枝の粉碎機、これはやはり地域の活動というのは若干お金も持っているし、それから、何か集まるかと言うと、もう最近では忘年会とかそういうことよりは、クリーン的な清掃活動、そこへわりと住民さんが集まるんですね。

それで、やはり市から地域に委託しています。今までのように業者委託ではなくて、地域の公園は地域でやって、それで少しのお金になると。でも、2回ではきれいにならないので、草を刈る、あるいは木が伸び過ぎているので剪定する。その剪定をした時にこのチップカー車が出ていくことによって、すごく行政との話も「よう来てくれたのう。」「きれいに刈ってくれましたね。」と言うと、普通、公園の維持管理をしているとあまりそういう地域に出向かないんですが、行くところなことを言われたいことになるので。我々はとにかくチップにして資源にして、これを遊歩道に敷いているところもあれば、あるいはもう欲しいというのは決まっているので、一切燃やすようなことはないんです。

だから、それを抑草、草が生えないようにする、あるいは学校でしたらもう一つ細かくして花壇に入れて土壌改良して、すぐには堆肥にならないにしても、将来的に土が肥えてくる。枝は生き物でもあるので、それを燃やすのではなくて、やはり循環して微生物が分解していく。

それから、先生にも給食の残り、生ごみができたら井鉢に2杯ぐらい調達しておいてく

ださい、なかったら家からでも探しておいてください、行った時にはどこかきれいに剪定できる時は剪定して準備しておいてくださいとか、先生にも課題を与えるんです。

学校も、みんな参加型にするためには枝1本ずつ持ってきましょうとか、車のそばまで運んで、とにかく循環しているということ、車の横にも「ごみゼロ社会をめざそう!」、それから「資源循環型社会を構築しよう!」というのと、それから「ストッピー」、ちょっと名前を言ったらストップというふうな感じがあるんですが、この「ゼロ吉」みたいなものですが、そういうものを覚えてもらったり、ビデオの中にも再三そういうキャラクターを使って浸透させて、先生にもともに課題を出すようにしています。

生徒への指導をうまく怪我のないように、僕らの言うことは聞かないので、先生の言うことは、やっぱりふざけ合うことになるので、そこはビシッとやって、後でまたあんまりひどい学校が校長先生にダメ出しするぐらい。逆に統制が取られ過ぎて意見も少ないから、良い場合、悪い場合も逆に学校のほうにも少しダメ出しするんです。ダメ出しと言うより勧告みたいな感じで。それでいいところはどんどん、どんどん、潜在的な能力はものすごくあるから、伸ばして行ってやってくださいと、そんな形で協働していきたいと思っています。

(岩崎委員長)

もう4時になりまして、だいたい時間が終わってしまいましたけれども、今日は冒頭に申し上げたように、何かを決めるというわけではなくて、今年度、特に「もったいない」を中心に生ごみの部分について、皆様方からいろんな貴重なご意見をいただいたと思います。今後また個別に、学校の立場、事業者の立場、あるいは実際に実践活動をしていらっしゃるという立場で、県の担当の皆さんも来年度、ある意味今年は助走期間だと思います。来年度きっちりやっていくための検討をいろいろと行って、お話をいただくこともあるかと思いますが、どうぞご協力のほうをよろしくお願ひしたいと思っています。

では、本日の議事については以上ということにしまして、進行を事務局のほうにお返しします。

(事務局)

岩崎委員長、議事進行をありがとうございました。

委員の皆様には長時間ご議論をいただきまして、ありがとうございました。いただいた意見等は、平成24年度に成果が上がるように取り組みをしていきたいと思っていますので、ありがとうございました。

次回の委員会については、秋頃に開催予定をしております。今度の議題については、「ごみゼロプランの点検・評価（案）」ということです。

それでは、本日はどうもありがとうございました。

(終)